



日本植物病理学会ニュース 第106号

(2024年5月)

【学会活動状況】

1. 大会開催報告

令和6年度日本植物病理学会大会は、東北地区の学会員で組織した実行委員会により、3月13日(水)～15日(金)の3日間、仙台市にある仙台国際センターで5年ぶりに対面で開催されました。大会初日の大会開催式・授与式では、大会委員長ならびに平塚和之 会長の挨拶の後、一瀬勇規 新会長、高橋英樹 新副会長の挨拶、大里修一 幹事長、染谷信孝 新幹事長ならびに新旧幹事の紹介の後、名誉会員(石井英夫氏、高橋賢司氏)・永年会員(秋本正信氏、本藏良三氏、堀江博道氏、大村敏博氏)の推挙と挨拶、学会賞・学術奨励賞・論文賞の授与と、一瀬 新会長の会長講演、3名の学会賞受賞者(古屋成人氏、三瀬和之氏、津下誠治氏)の受賞講演が行われました。午後からは、学術奨励賞受賞者(千秋祐也氏、深田史美氏、煉谷裕太郎氏)の講演に続き、一般講演がスタートしました。初日夕方の情報交換会は、国際会議場内の展示棟にて、奥田誠一 名誉会員の乾杯の音頭により盛大に開催されました。コロナ禍のため5年ぶりに開催された情報交換会であり、会員相互の交流と懇親を深める機会になりました。

今回の大会では二つの新しい試みを行いました。一つは基本的に対面での開催ではありますが、一部オンラインでの参加(講演ならびに視聴)を実施したことです。諸般の事情により、対面での参加が難しい会員の方々にはオンラインでの参加を可能とするようにいたしました。しかしオンライン配信は経費的には負担となりました。二つ目はプログラム・講演要旨集をPDFで配布したことです。紙媒体と比較して印刷費・郵送費の節約になりましたが、電子媒体の要旨集は閲覧しにくいとのご意見もいただきました。いずれも、今後引き続き検討が必要と思われます。

総計で大会参加者数が828名(内オンライン参加45名)、情報交換会参加者数453名という多数の皆様のご参加を頂き、3日間の日程を無事終了致しました。大会・情報交換会参加者数は、コロナ禍前の水準に回復しており、

これもひとえに、会長を初めとする学会役員の皆様、座長や学生優秀発表賞の審査員をお引き受け頂いた皆様、協賛・ご協力頂いた諸団体、開催準備・運営に当たって頂いた実行委員の方々、そして大会参加者の皆様のご支援・ご協力の賜物と存じます。改めて、厚く御礼申し上げます。

(大会委員長 高橋英樹)



写真 平塚代表理事・会長挨拶



写真 一瀬新会長による会長講演

2. 研究会・談話会開催報告

(1) 第17回バイオコントロール研究会

第17回バイオコントロール研究会を2024年3月16日に東北大学川内北キャンパスで開催しました。2021年開催の第16回研究会はオンライン形式での開催であったことから、対面での開催は2018年の第15回研究会以来、実に6年ぶりでした。

多くの方にご参加いただけるか心配しておりましたが、各都道府県の公設試験場や国立研究開発法人、民間企業、大学などから100名ほどの方々にご参加いただきました。

基調講演では、吉田重信新会長（農研機構）から「バイオコントロール研究の今後の課題と展望」と題して、本研究会の過去の講演内容の振り返りと今後のバイオコントロール研究の方向性や課題についての示唆に富むお話をいただきました。続く講演会は二部に分けて行いました。第一部では「実践的な微生物資材施用法および微生物資材の開発」というテーマで、最初に村田つばさ氏（三重県農業研究所）より「常温煙霧処理技術を用いたトマトうどんこ病に対するポーベリア・バシアーナ乳剤の防除効果」の演題で、1980年代に開発された常温煙霧処理技術を微生物農薬散布に応用するという新しい取り組みについてご紹介いただきました。次に、宮崎暁喜氏（岐阜県農業技術センター）より「微生物農薬を主体とした頭上散布装置を利用したトマト灰色かび病に対する省力的防除技術」の演題で、ミスト散布やチューブ散布による微生物農薬の効率的施用法についてご紹介いただきました。最後に、東條元昭氏（大阪公立大学）より「植物病害抑制効果に着目したミミズ堆肥の開発」の演題で、近年問題となっている放置竹林のタケ材を用いたユニークなミミズ堆肥の開発とその病害抑制効果について報告していただきました。第二部では「拮抗微生物の効率の探索と機能向上のための新しいアプローチ」というテーマで、4題の講演を予定しておりましたが、演者のお一人である竹内香純氏（農研機構）がやむを得ない事情でご欠席となったため、3名の方々からご講演をいただきました。はじめに、中原浩貴氏（農研機構）より「青枯病菌の表現型変異株を利用した生物的病害防除」の演題で、非病原化させた青枯病菌変異株の青枯病や半身萎凋病に対するバイオコントロール活性やその作用メカニズムについて報告していただきました。次に、橋本将典氏（静岡大学）より「根圏微生物叢の理解を通じたバイオコントロールの可能性」の演題で、植物が分泌する二次代謝産物を介した植物と根圏微生物叢の相互作用とそのバイオコントロールへの応用可能性について紹介していただきました。そして最後に、成川恵氏（筑波大学）より「微小液

滴技術を用いた拮抗微生物の迅速スクリーニング法の開発」の演題で、インクジェットプリンターといった工業用途からデジタルPCRなどの基礎研究など、様々な分野で活用されている微小液滴技術を、拮抗微生物の大規模スクリーニングに応用する研究についてご紹介いただきました。第一部と第二部のいずれにおいても、予定時間を超えるほどの活発な質疑応答が行われ、非常に有意義な研究会となりました。（清水将文）

(2) 第15回および第14回植物ウイルス病研究会

第15回植物ウイルス病研究会は、令和6年度日本植物病理学会大会終了翌日の令和6年3月16日に東北大学川内北キャンパスで「グローバル化に対応したこれからの植物ウイルス研究」と題して開催された。参加者は座長・演者等を含めて115名であった。

午前中は「侵入警戒ウイルス・ウイロイド病」について、はじめに「日本国内への侵入を警戒するウイルス・ウイロイドとその検出事例」という演題で、柳澤広宣氏（農林水産省横浜植物防疫所）から、近年植物防疫法上問題となっている、ウイルス・ウイロイドと植物防疫所での対応を中心に紹介していただいた。これを踏まえて、松下陽介氏（農研機構 植物防疫研究部門）からは、「種子伝染するウイロイド～次世代組織に侵入できる non-coding RNA～」と題してポスピウイロイドの種子伝染を中心とした話題を、久保田健嗣氏（農研機構 植物防疫研究部門）からは、「Tomato brown rugose fruit virus の種子伝染性等諸性質および防除技術開発の取り組み」と題して国内への侵入が危惧されている ToBRFV の種子伝染をはじめとした諸性質の紹介と防除に向けた取り組みについて、今辰哉氏（秋田県立大学生物資源科学部）からは「Tomato mottle mosaic virus の分子特性と病原性」と題して ToMMV が国内に侵入した場合の国内既存品種に与える影響に関する研究が紹介された。また、小枝壮太氏（近畿大学農学部）からは、「ナス科、ウリ科野菜におけるジェミニウイルス抵抗性と育種利用」と題して、実用品種にも導入を進められている抵抗性素材の特性やその評価方法など、育種側から新興ウイルスであるベゴモウイルスへの研究アプローチについて紹介していただいた。座長の小松 健氏（東京農工大学農学研究院）のフランクなハンドリングによって活発な議論、特に若手研究者から積極的な質問があったのは印象的であった。

午後は「植物ウイルス分類の動向」について、はじめに鈴木信弘氏（岡山大学資源植物科学研究所）より「ICTV による2名法導入とウイルス種名・系統名あれこれ」と題して、ウイルス学名への2名法の導入とその取り扱いと命

名方法についてわかりやすく説明していただいた。次に望月知史氏（大阪公立大学農学部）より「日本植物病名目録に記載されるウイルス病名とウイルス和名の付け方について」と題して、国内で新規に発見されたウイルスへの和名の付け方と病名の付け方について、植物ウイルス分類委員と病名委員の立場から、具体例を挙げながら紹介していただいた。

今回、初の試みとして「植物ウイルス病研究におけるメタゲノミクスのいま」と題したパネルディスカッションが行われた。オーガナイザーを関根健太郎氏（琉球大学農学部）、ファシリテーターを湊 菜未氏（新潟大学農学部）として、植物ウイルス分類にメタゲノム解析を先駆的に取り入れている一木珠樹氏（農研機構 遺伝資源研究センター）、藤崎恒喜氏（公益財団法人岩手生物工学研究センター）とウイルス分類の立場から望月知史氏（大阪公立大学農学部）、行政的立場から柳澤広宣氏（農林水産省横浜植物防疫所）をパネリストに迎えて、ウイルス同定・分類におけるメタゲノム解析の利点とこれからのあり方について会場からの質問も含めて活発な議論が行われた。

最後は特別講演として大島一里氏（佐賀大学）から、「ウイルス拡散の遙かなる時空を求めて」と題して講演が行われた。講演はカブモザイクウイルスの分子進化に関するこれまでの研究の成果だけでなく、若手研究者へのメッセージや分子進化の研究を始めるに当たって、世界中からウイルスを収集するための苦勞やそれによって得られた研究ネットワークなど論文からは知ることができない楽しい話をしていただいた。特に最初に投稿した論文が査読者に理解してもらえなかったエピソードはとても印象的であった。

これらの研究会の内容については、研究背景や図表などを含めて詳しく解説した講演要旨を執筆して頂いた。「植



写真 大島一里氏による特別講演

物ウイルス病研究会レポート第15号」は、14号がPDFファイルにより配布され、本大会もPDF化されたことから、参加登録者にはPDFファイルを事前配布した。最後に、講演者、座長ならびに参加していただいた多くの皆様に改めて厚く御礼申し上げる。（藤 晋一）

第14回植物ウイルス病研究会※

（※本会は2022年3月に開催されましたが、開催報告が学会ニュース未掲載でした。そのため、第15回開催報告と併せて掲載いたします。）

第14回植物ウイルス病研究会は、令和4年度日本植物病理学会大会終了翌日の令和4年3月30日に札幌市の北海道大学農学部にて対面開催を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの流行状況を勘案して植物病理学会大会がオンライン開催になったため、本研究会もオンラインで開催することになった。今回は、テーマを「ウイルス病耐性植物の作出に向けた新たな知見」とし、特別講演を含め合計9名の講師の方々に最新の研究動向を紹介して頂いた。参加者は79名であった。

午前中、まず大木健広博士（農研機構北農研）から「寒地畑作物におけるウイルス抵抗性」という演題で、北海道の主要な畑作物であるジャガイモにおけるジャガイモYウイルスおよびコムギにおけるコムギ縮萎縮ウイルスによる病気とそれらのウイルスに対する抵抗性に関する研究が紹介された。次に直井崇博士（北海道大）から「トマト野生種におけるジャガイモやせいもウイロイドに対する耐性」という演題で、トマト近縁野生種2種で見つかったジャガイモやせいもウイロイドの中間および致死の2系統に対する強い耐病性について紹介された。そのあと吉川信幸博士（岩手大）による特別講演が行われた。「リンゴ小球形潜在ウイルス：構造、生物学的性状、およびウイルスベクターとしての利用」という演題で、ウイルスベクターとして有用性が高いリンゴ小球形潜在ウイルスに関する約20年間の研究を総括する講演であった。続いて佐野輝男博士（弘前大）による特別講演が行われた。「ウイロイド研究—最近の話題」という演題で、ウイロイドの分子構造と生物学的機能、特に病原学的な側面を中心に、最近のウイロイド研究の進展が紹介された。

午後には、安藤杉尋博士（東北大）から「RNAサイレンシングのプライミング機構とそのウイルス抵抗性への関与」という演題で、RNAサイレンシング関連因子AGO2遺伝子発現のプライミングがウイルス抵抗性に関与する植物免疫のプライミングの一翼を担っていることが紹介された。次に橋本将典博士（東京大）から「植物ウイルスに対

する新たな劣性抵抗性遺伝子の発見とその作用メカニズム」という演題で、劣性抵抗性品種が発見されていないポテックスウイルスに対して、シロイヌナズナを用いて発見された新規の劣性抵抗性遺伝子 *EXA1* および *nCBP* とそれらの作用メカニズムが紹介された。続いて、新子泰規氏（キッコーマン株式会社）から「トマトの新たなウイルス抵抗性アレル」という演題で、トマトの遺伝子編集による新たな抵抗性アレルの開発、なかでも予想外に認められた eIF4E 変異とキュウリモザイクウイルス抵抗性を中心とした研究が紹介された。次に、石橋和大博士（農研機構生物研）から「二本鎖 RNA 分解酵素による植物のウイルス抵抗性機構」という演題で、ダイズモザイクウイルスに対するダイズの抵抗性遺伝子 *Rsv4* の機能解析で明らかとなった植物の新たなウイルス防御機構が紹介された。また、その機構から着想した二本鎖 RNA 分解酵素を利用した人工ウイルス増殖抑制タンパク質の設計について紹介された。最後に、早野由里子博士（農研機構生物研）から「イネの縞葉枯病抵抗性と生育安定性」という演題で、イネ縞葉枯ウイルスによる縞葉枯病に対する抵抗性を担うイネの *Stvb* 座遺伝子の一つ、*Stvb-i* について紹介された。*Stvb-i* は ATP 結合ドメインを有する機能未知のタンパク質をコードしているが、そのタンパク質はウイルスの増殖を直接抑制するのではなく、イネ植物体の成長を支えることであると考えられることが紹介された。

なお、藤晋一博士（秋田県立大）、鈴木信弘博士（岡山大）、志村華子博士（北海道大）、中原健二博士（北海道大）には座長を担当して頂き、活発な質疑応答を先導して頂いた。また、講演者の皆様には、講演内容を理解しやすいように研究背景や図表などを含めて詳しく解説した講演要旨を執筆して頂いた。この講演要旨集である「植物ウイルス病研究会レポート第 14 号」は、PDF ファイルで今回は配布した。最後に、講演者、座長、そして参加して頂いた聴衆の皆様改めて厚く御礼申し上げます。（畑谷達児）

(3) 第 33 回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

第 33 回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウムは、2024 年 3 月 16 日に 2019 年以來の対面開催を実現することができた（一演題は海外より演者が Zoom にて参加）。開催にあたり、大会委員長の高橋英樹先生や日本植物病理学会には多大なるご協力を頂いた。今回は、公的機関、大学、農業メーカーおよび農業団体だけでなく、学生も含めて 114 名の方々にご参加頂いた。活発な質疑応答もあり、海外からの Web での講演についてもトラブル等なく盛会で無事閉会を迎えることができた。

最初の発表は、秋田県仙北地域振興局農林部の佐藤 裕様より、「秋田県における MBC 剤および DMI 耐性リンゴ褐斑病菌の発生」の題で、秋田県で 1998 年に発生した MBC 系の褐斑病耐性菌のその後の県内各地での検出状況、DMI 耐性菌の発生とその原因について披露頂いた。治療剤に頼らない防除体系の必要性や耕種的防除も含めた提案をご説明頂いた。最後に短時間での感受性検定の際の、病原菌の分離法のコツについても共有頂き、本病原菌が培地上での生育が遅いため大変参考になる知見だった。

次に愛知県農業総合試験場の恒川健太様より、「愛知県における灰色かび病菌の薬剤耐性獲得状況調査及びその対応」の題で、AS-qPCR 法を利用した QoI 剤および SDHI 剤の灰色かび病に対する簡易で早期な感受性検定法についてご紹介頂いた。当初はインゲンリーフディスク法で検定を実施されていたが、手間と時間がかかるため、病原菌と薬剤耐性の遺伝子変異について整理され、ハイスループットの検定法を開発された。検定結果を現場に説明する際に



写真 会場の様子

は、簡単で直感的に理解できるようにすることの大切さについても共有頂いた。

3番目に滋賀県農業技術振興センターの小幡善也様に「滋賀県で分離されたタマネギ腐敗病菌の薬剤感受性と各種殺菌剤の防除効果について」の題で、県内で作付面積が増加しているタマネギの細菌性腐敗病害の発生状況、薬剤感受性結果およびその結果に基づいた圃場試験結果をご紹介頂いた。県内各地で発生したタマネギ腐敗症状について遺伝子的手法を用いた解析により、5種の病原細菌が関与しており、そのうち *Burkholderia cepacia* が優占していることを明らかにされた。薬剤感受性検定の結果、活性の高かったオキシロニック酸の処理は圃場試験でも貯蔵前・貯蔵後の発生を抑制する結果が得られた。本病害はアザミウマの加害により発生が助長されるとの見解もあることから、殺虫殺菌剤の防除体系の試験を計画されている。

午前中最後の発表は、奈良県農業研究開発センターの浅野峻介様より「トマト葉かび病に対する有効な SDHI 剤の探索」と題して、奈良県内で採取されたトマト葉かび病菌に対する各種 SDHI 剤の感受性検定、感受性程度の異なる病原菌を用いた植物体を用いての防除試験結果を共有頂いた。感受性検定の結果、MIC 値の分布パターンにより様々な SDHI 剤を2種に分類できた。その中でも特に活性の優れたイソフエタミドについては、予防効果だけでなく治療効果も優れることが分かった。現状の防除体系の中心である多作用点接触阻害剤では治療効果が期待できないため、発病しやすい時期にはイソフエタミドを推奨された。

午後最初の発表は、日本曹達(株)の西野茂樹様より、「新規殺菌剤キノプロール®(ミギワ®)の作用特性と感受性検定」と題して、有効成分の作用機構を含めた基礎的な知見、代表的な病原菌に対する評価・感受性ベースラインをご紹介頂いた。本剤は、農園芸用殺菌剤として実用化された初のジヒドロオロト酸デヒドロゲナーゼ(DHODH)阻害剤であり、新規作用機構の殺菌剤である。代表的な病害に対する植物体を用いた評価結果を共有頂いた。感受性検定方法も示され、その結果から得られたベースラインも提案された。

最後の発表は、シンガポールから Zoom で繋ぎ、Syngenta Asia Pacific Pte. Ltd. & Founding chairperson at Asia FRAC の Susan Knight 様より、「Role and Activities of the Asia Fungicide Resistance Action Committee (Asia FRAC)」の題で、Asia FRAC の取組・問題になっている病害に対する指導についてご紹介頂いた。各国と様々なアプローチで教育を進めておられ、殺菌剤の抵抗性マネジメントを成功させるには各国の多くの農家がこの取り組みに対する理解を深

める必要があるとご説明頂いた。その活動にはラベルへの FRAC コードの記載推奨も含まれており、農家に出来るだけ容易で分かりやすい説明が必要であることの重要性について強調頂いた。

最後に本シンポジウムの開催にあたり、講演者の方々および多数の質問をお寄せ頂いた参加者の皆様に改めて厚く御礼申し上げる。また、アンケートも多数お寄せ頂き感謝申し上げます。より良いシンポジウムとするべく今後の参考にさせて頂きたい。次回も多数の皆様に積極的なご参加をお願いしたい。(常松孝祐)

(4) 第2回ダイバーシティ推進セミナー

令和5年度は、これまでの名称であった男女共同参画推進委員会をダイバーシティ推進委員会と改めました。令和5年度の主な活動として、仙台大会初日3月13日12時~13時にランチョンセミナー形式で第2回ダイバーシティ推進セミナーを開催したことをご報告します。今回のセミナーは、「植物病理学分野で働く私のキャリアとライフイベント」と題し、世代や所属する組織の異なる方からのお話を聞く機会を提供することを企図しました。参加者は129名で、準備した弁当100食を上回る盛況となりました。

セミナーは、2023年度学会長平塚和之氏よりダイバーシティ推進に対する学会からのエールをいただきスタートしました。一題目は玉川大学の渡辺京子氏より「思ったこと、考えていること」と題して、日本の男女共同参画の歴史をご紹介いただき、その流れの中で、ご自身のキャリアにおける具体的な経験から折々に感じられたこと、そして、どのような考えをもって皆さんにキャリアを進めて欲しいかについて提言いただきました。二題目は北海道立総合研



写真 講演後のディスカッションの様子

究機構の栢森美如氏より「工夫次第でなんとかなる」と題して、農業研究という、知力のみならず体力も求められるがちな分野における仕事の工夫と、工夫することが、自身のみならず作業補助者を含む周囲の作業改善にも繋がることをお話いただきました。三題目はクミアイ化学工業株式会社の寺田壮志氏より「植物病理学を活かした企業での殺菌剤開発研究」と題して、農薬メーカーにおいて経験を積みながら製剤開発に携わっていること、また、将来は研究開発のみならず、複数のキャリアが想定されることを紹介されました。閉会ご挨拶として2023年度副会長の一瀬勇規氏から、ダイバーシティ推進を会員の意見を聞きながら丁寧に進めたいことをお話いただきました。

今回のセミナーは、ライフイベントと仕事との関連よりも、キャリア形成の過程で感じられたことを重点的に聞き取る機会となりました。いずれの講演者も、植物病理学会における活動や発表が、ご自身の研究の支え、モチベーションに繋がっているとの紹介があり、とても嬉しく思いました。今回のセミナー参加者が、それぞれの立場で心に残ったこと、それに対してどう感じたかを、無意識のバイアスを意識しながら思いを馳せていただけたら、と思います。

セミナー後のアンケートによると、会場の参加者は20代(46.7%)、30代(19.4%)、40代(8%)、50代(17.8%)、60代以上(8.1%)と、若手を中心として幅広い年齢の方々に興味を持っていただけたことがわかりました。このうち、学生会員は30.6%でした。学生の方々には、社会人になっても学会の会員として長く活動していただくことが学会の大きな課題のひとつであると認識しております。そのために、今後も植物病理学会に参加することが元気の源となるような、風通しのよい、自由で闊達な学会であり続けたいという思いで、新年度もこれまでの議論を継続したいと思います。最後に、本活動の必要性への理解と支援にあらためて感謝申し上げます。(中馬いづみ)

(5) 第7回植物病理を紡ぐ会

第7回植物病理を紡ぐ会は、植物病理学会大会開催前にあたる令和6年3月9日にオンラインにて開催された(写真1)。前身である『全国「若手の会」を目指して』勉強会より数えて9回目となった今回は、大学、公的研究機関、企業から203名(学生62名)の事前参加登録を得て(約130人の同時接続を確認)、活発な質疑応答が行われ、非常に熱のこもった勉強会となった。

これまで植物病理学会のいくつかの部会では、学生・若手会員の研究交流・情報交換・交流を深める場として「若手の会」があり、活況を呈してきた。「植物病理を紡ぐ会」

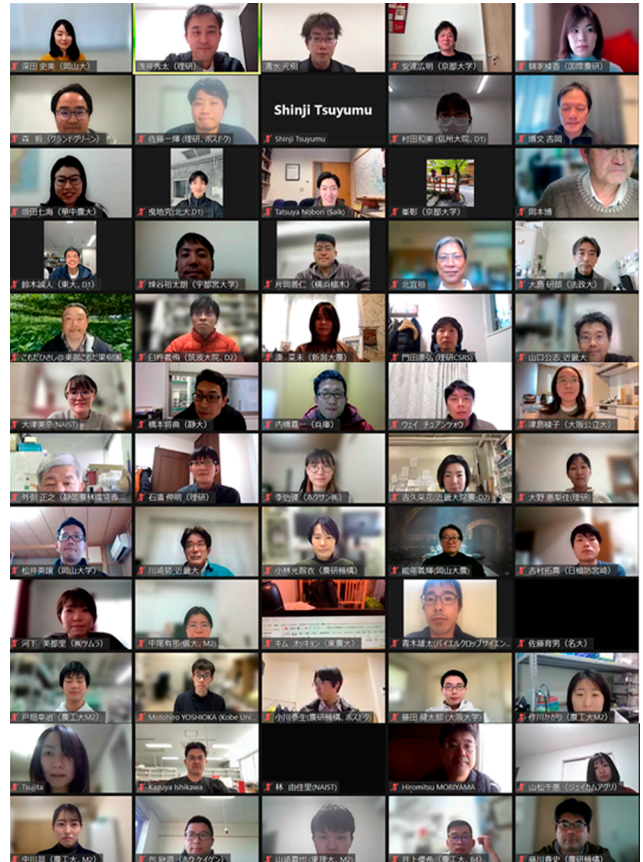


写真1 参加者一同(一部抜粋)

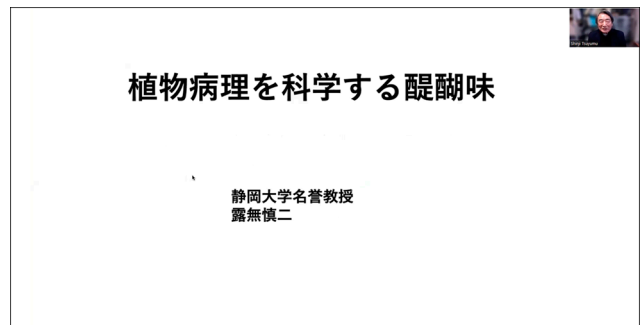


写真2 特別講演の様子

は、そのような場を全国大会の場でも作り、特に学生・若手会員に対して、①「現場から実験室まで」、「基礎から応用まで」という植物病理が扱う対象の広さ、面白さに触れてもらい、②そのような植物病理学を学んだ人間の人生・将来の選択肢の広さを知ってもらうこと、さらには③業種や分野の垣根を超えた植物病理に関わる人間の異分野交流、の3点を目的として、文字通り、植物病理の「分野」と「人」を紡ぐための場として企画された、植物病理学会若手・中堅有志による自主勉強会である。本会では、植物

病理の幅広い分野からの講師を招き、現在の研究や職務だけでなく、学生時代から今の研究・職務へと至る「半生史」をご紹介いただくこととしている。現在、各方面で活躍されている方々がそれぞれ人生の岐路でどんなことを考えて、どんな選択をしてこられて今に至るのか？という、いわゆる研究・職務の裏側に触れる機会というもの、若手・中堅研究者にとっては示唆に富んだ貴重な経験になるのではないかと考えている。

そのような趣旨のもと、今回は、登達也氏（ソーク研究所）による「植物と微生物、解体と再構築」、大津美奈氏（奈良先端大）による「シストセンチュウは破壊者か？建築家か？」、森毅氏（グランドグリーン株式会社）による「アグリバイオスタートアップ企業における研究者としての仕事」さらに、清水元樹氏（岩手生工研）による「～育種学から植物病理学へ～ イネいもち病抵抗性遺伝子 *Pias* の発見から分かったこと」という4題の講演をお願いした。まず、登氏からは、「Technology-Biology」をテーマに、博士学生時代から今に至るまでに自身が選択し、進めてきた Technology の開発と Biology の解明について、話題提供いただいた。現在進めている1細胞レベルでの時空間的な解析についての将来展望を含め、参加者と共に議論する大変貴重な時間となった。大津氏からは、シストセンチュウと植物の相互作用について細胞生物学的な大変興味深い知見についてご紹介いただくと共に、自身の留学経験・経緯について赤裸々に話題提供いただき、特に海外留学を目指す学生・若手会員にとって、大変参考になる内容であったと感じた。森氏からは、大学発ベンチャー企業の運営および研究開発の実情についてご紹介いただいた。質疑では、知財に関する議論が行われ、企業での働き方および産・学の繋がりについての課題を考える良い機会になったと感じた。続いて清水氏からは、自身の博士進学、研究者としてのキャリア選択の経緯をご紹介いただくと共に、イネの NLR 型抵抗性遺伝子および認識されるいもち病菌エフェクターの同定と、それにより見えてきた抵抗性遺伝子とエフェクターの共進化について、話題提供いただいた。「気付いたら博士だった」、「人類の役に立つことができる気がした」とのキャリア選択の経緯の話が印象的で、個人的にも、興味の追求と目的という研究の本質について再認識する機会になった。

さらに、一時代を築かれた経験豊かな講師から若手中堅へのメッセージも含めて「半生史」を語っていただきたい、という声から始めた特別講演として、今回は露無慎二氏（静岡大学名誉教授）に「植物病理を科学する醍醐味」と題し、ご講演いただいた（写真2）。「科学とは、演繹法（法則に

実証を当てはめて、結論が正しいことを証明する）と帰納法（個々のデータや客観的事実を集めて導き出す）でフィードバックさせながら自然の謎を段階的に解明していくもの」との理念を基に、これまでの研究成果について大変わかりやすくご紹介いただいた。軟腐性 *Erwinia* 属細菌の発病因子であるペクチナーゼをモデル系として、その生産制御機構について、またカンキツかいよう病菌をモデル系として病原性関連因子の探索と、それら因子の性状・機能について、熱量高くお話される姿に、大変感銘を受けた。最後には、様々な研究者、特に海外の研究者と材料や意見を交換しながら進められたことが大きかったとお話され、改めて「人との繋がり大切さ」という植物病理を紡ぐ会の趣旨に立ち返る機会をいただいた。以上、露無氏のありがたい・力強いメッセージを参加者一同、心に刻み込むことができた。

以上のように、限られた時間ではあったが、多彩な講演者の研究に対する熱意および「半生史」を参加者一同共有させていただいた。本勉強会の目的の一つの異分野交流に関しては、セミナー終了後、ウェブ懇親会を行い、活発な意見交換が行われた。末筆ではあるが、週末の開催にも関わらずお集まりいただいた参加者の方々、また、多忙な時期にも関わらず（しかもボランティアで）お引き受けいただいた講演者の方々に、世話人一同心よりお礼を申し上げる次第である。（浅井秀太）

【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

有江 力氏（東京農工大学理事・副学長）が2024（令和6）年度「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。日本農学賞は日本農学会が選考会を行い、日本の農学研究者間における最高の榮譽として毎年授与を行い、同時



写真 受賞祝賀会の様子（受賞者の有江 力氏：前列左から2人目）

に読売農学賞へ推薦する形式が取られています。受賞の対象となった研究業績は「土壌伝染性フザリウム菌の分子系統と発病・病原性分化機構に関する研究」です。日本農学賞授与式・読売農学賞授与式は、第95回（2024年度）日本農学大会（2024年4月5日、東京大学弥生講堂）にて行われました（写真）。授与式および受賞者講演では有江氏に縁のある会員がお祝いに駆け付け、またオンライン配信でも多くの会員が受賞を祝われました。（大里修一）

【学会活動予定】

1. 2025年度大会

日時：2025年3月26～28日

場所：サンポートホール高松（高松市）

事務局：香川大学

2. 部会

(1) 北海道部会

日時：2024年10月12～13日

場所：北海道大学（札幌市）

(2) 東北部会

日時：2024年9月頃

場所：山形市内

(3) 関東部会

日時：2024年9月13日

場所：東京農工大学（府中市）

(4) 関西部会

日時：2024年9月19～20日

場所：愛媛大学（松山市）

(5) 九州部会

日時：2024年11月14～15日

場所：アバンセ（佐賀市）

3. 談話会・研究会等

(1) 第23回植物病原菌類談話会

日時：2024年6月22日

場所：オンライン開催

(2) 第58回植物感染生理談話会

日時：2024年9月1～3日

場所：名古屋大学（名古屋市）

(3) 令和6年度植物病害診断研究会

日時：2024年秋頃

場所：開催場所未定

(4) EBC研究会ワークショップ2024

日時：2024年9月頃

場所：東京都内またはその周辺

(5) 第18回植物病害診断教育プログラム

日時：2024年9月頃

場所：横浜国立大学（横浜市）

(6) 植物細菌病談話会

日時：2024年秋頃

場所：開催場所未定

(7) 土壌伝染病談話会

日時：2024年10月17～18日

場所：文部科学省研究交流センター（つくば市）

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしくお願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、佐々木信光、染谷信孝、富高保弘

編集後記

学会ニュース第106号をお届けします。令和6年度日本植物病理学会大会は3月13日～15日の3日間、ハイブリッド方式で開催され、計828名の参加があったとのことです。大会会場が対面方式となったのは平成31年度つくば大会以来です。会の開催や運営にご尽力いただいた皆様に、感謝申し上げます。

有江力氏（東京農工大学理事・副学長）が「日本農学賞」/「読売農学賞」を受賞されました。本学会会員の受賞は昨年度に引き続き、2年連続となります。誠にありがとうございます。

最後に、今年度の学会ニュースは、上記学会ニュース編集委員コーナーにある委員で編集を行います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。（門田育生）